一調頭附

全

特別
チ12
3643
95

故
梅若誠太郎氏
昭和三十五年十月
梅若重次氏
寄贈

江口 一ウ
三井寺 二ウ
雲林院 四ウ
花筐 六ウ
百萬 八ウ
梅川 十ウ
東岸居士 十五ウ
大車 十七ウ
篁古敵 十九ウ
放下僧 二十ウ
芭蕉 一ウ
烏帽女 三ウ
二人静 五ウ
月 七ウ
柏崎 十ウ
弄石 十三ウ
蟬丸 十六ウ
鳥追 十八ウ
笠ノ阪 二十ウ
松虫 二十二ウ

江口

紅花の春はいかゝ紅錦繡の山
桜をあらとみるも夕のけしきにも
そうはまた紅葉の秋乃夕黄頽頽
たる林色をみるもとゝ以た卯の霜
ようつゝ松に月を詠とゝ
賓客もさつく来る事の翠
帳紅閨よ枕をあらそ妹背もいつ
しかまよかいなくゝ花よりうん花より心か
ゝ草木情あるゝ人婦いかゝ魂を
通つまりつゝいたもとしもつとゝ
ある時を色よりうえ貪ゝ乃たゝい

俳うらみあるときは色を愛執の心いとふかき四方四日はまつ妄
言は縁とあるものをうや皆人を
はなれ塵の境より遠ひ六根の罪をは
なるまを見くまを見くまるまより遠ふ
こころ物へしへ

芭蕉

あよちりきゆ樓臺はまつ月とう
るなり陽よりうる新あはまく
まよあの事やさきなる甚こと
いつも柳くの実めの前よ面白

やか春を夏たき秋くる風の音
信を濃のあきはくえうよ紀をよ
るる秋とまくはるの所は古寺
の庭の草思ふとまれといふ色
新は嵐の音ふのこ芭蕉笠ふも
ろくを落くる露の身ををき前
あるき出のをのあるのもきくをとれ
四の秋とそもあるとう稽ふ母
ゆや思くく定めのきくふこ芭
蕉笠の夢の中ふ小鹿の聞を
秋くを実のあるるあるきあ人心
思ひいるさの山をあまと雖月

如とり使い別ぬる秋の山の音
紀の国きさい小篠原志のま物
おもいろまふ神志ちりつるわくさん

三井寺

山寺の夏の夕ぐれまてうれん
八連の鐘よ祝ふ為ふ為たた
しめともなと夢の春と夢ぬ
ら舟し其外暁の妹背を惜むき
ぬくの恨とそ鳴る物清水も
枕の鐘やひゝそ寝み物音よふ
きゆく秋の志ま志けもあぬ別

出島ハ初りハと詠きを名路の
仔りの音信の志とゆあとみハ
若ゐくれ寝ぬ寝ぬほうゝ志を
今思ひの夢たゆもちゝ心
の淋しさよ洲鐘のたゝくと思へく
を書す暁とつの時まらく
ま月落烏啼く霜天よ満
て冷く江村の漁火しほのゝま
半夜の秋風郷音ハ客の私まや
面ゝ人蓬窓ゐ志ゝて別
塩汐の楫枕うき私うかれ
洲海ハ浪風も都まく秋の物寸

うち月をまつ丹寺の鐘うさも
哀

姫女

翠帳紅閨よ程なくつゝ庵の上もれ
しゆまのまうらも同じ花の秋山
めもあるゝよりそれもたゞ世の哀
のうとゝなりもせいつ迄草の露
ぞいまはしも比翼きの程の明てしろの
礒山宮ぞい私語しも雅り史作つく
今の世迄編きうん玄まて心種畫
乃秋うちえよりのるとゝよの牧
ゐうきものれと あてゝ言葉の人心

頼めてこゝあ頼いつゝられも欄干よ
立つゝてをるこの宮よと弥心
きハタ雲乃秋風嵐山南畳分
をあの杉をこゝうい音作られ秋ま
つ人よりれをを居まをいつきう海
し きをもものの明てと乃扇手に
ぬまゝく風のたゝりと思つやをを
夏心をやきき乃まゝれあゝ風
ひやくふ吹落を園意の扇を
ゆきるゝ明てゝるを家のも冷くく
秋風ゝゝ見あゝるすやを思つゝ見
をゝあつをわう身迄るゝ甚

雲林院

二月やまゝ霞あれと月はいとゝ
るゝる高砂の松日ぬ本の中ふ
ゝ月と云事は神大切よ有ゝの
遍照ゝ作ゝ松ゝ乃歌積ゝ
あゝゝゝゝをかわりたもしゝ
も速ゝ行ゝうゝ者ゝゝゝ

四方春ゝの袴踏ゝ裾ゝ袴ゝ
るゝやまゝ霞ゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃夜袴ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ 俊濃路やゝの糸ゝ
ゝゝゝゝ乃袴を冠のゝ
ふゝゝ四乃袴ゝ二月乃
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
行

二人静

玉ほこの沈丹くよ道をつきけり角
くもりく泄山よわをハ紅ふ比い春
所ハくもり賢乃紀よ宿りるきくち
色乃とりるくほる新品よ移もせ
如夢とを紀もちるまくとよ一栄一
らをまのあるる宿世とくよ
泄山をれらくゆく　青清男家の
天皇大友の皇子よとうハまて紀
山ふふこ遠い富乃こふきを賴こ
ゆまい宮るらるあれる神祭
尺やたき西河乃瀧神うれらい
宮居ても海ハかるるりるそも

みすのいたの世本陰乃紀の言
色たまくぬ奥山乃をとさ
き春の夜乃月ハたほるまて移
あ印乃やまふりこわを迷のゆく
石を海る　唐士のらくを紀る所
を捨く遊子弱月よゆきもの
所乃うよちくよ高乃紀をふんて
れるく惜を中年の春の夜も
つるくらくらハりきみよのくも
ぬるる新延也延辛の春の賢
やあをとのこ尺よのく奥深く
をるくる山ふる邪

花筐

ちあふやく世る末世よなかて
そと日月を地よ落すまろちか
もとぬ花のすさをあらわれやあ
らわ雲むよたとし給へ天の岩
めしたちまちよ闇あつり給ひて
わのうちくる神氣しくときのあ
神ひといへまつりを給ふる人よ
いよれさせ給ふか　明様よ中きを
くそうつるき花筐の
こくや和漢を覧継君はまくい其
此名皇子の御身なれとあさくと

六

君御勅よ花筐を手向礼拝し南無
天照皇太神宮天長地久と祝
あつ給ひつゝ御手をあはせ給
給ひし御面影は君まぢりて見
まし形見ゆ遊しむる中やこひしや
深奥の神の跡の花のつこの門
うしへ他を慈雉の無ふとちうの雉
ゆかす礼まさる君の為宮寂よ捨て
たよ濁ある月の都ハ名のうち
袖よもつ給ましみ手にしをちま
す唯法よ水の月をの玄の猿歌
こくなく咄ひかて帰府くろ

日

御門のく歌のきこえしつゝ其内の
たちを耳泉殿の叡覽のまゝ秋を
畫圖よ立てして明言歌を詠い
きり出きをるく涉見日はまれ
もおいひのく人事のををかりを
歌まを詠つをもをを中たるのい
をけるくまの風俗天帝にをを
詠のやう書まゝ本は見上界
の饗宴くの詠いくの仙女のり一旦
人間まをくとゝ中せをも詠ふを

やの御宮よ御りぬ春山霞居よ
まりの月を書まゝの面影ををい
らく宴よまぬくくをく九月盃の
中をくく反魂香をたを詠ふ夜夜
を人をつまりに出をを月秋
なるふをぬを思ふ面影のあるか
きのよのきをくを移やまの思ひ
草のををよ山をふ白露の手ふ
をたまをて程もるく唯をくよ
消ぬまに深淵惣楊をてみ影
ぬき方の
まゝ人のをんをめく耳泉殿を

立ちくるしき雲のはたてに
みなきかたまたまき花のうつ
ろひ

百萬

京良坂のこえて町ハのみち面と
みえしかくるゝも倫人のなき跡の源と
すゑのたゝうこと際なきを思ふまに
百年あまれ流れの月の影ハ行き
西の大寺の柳陰みとりあらゆく
色白露のはたゝ別まくいつちとも
たゝたゝまりたゝまぬ習

東寺五重のつゆもあをゝ京
長の都をとゝのくゆゝ三笠山さか
の月をうつす淀のゝ山城の井手の
里の水をゝのうつして歌うたを面歌
御まつ紀伊ゝ歌ゝうつして月日と
送る所の年の所ゆゝひまの家
をゝ伊きく行程ハ都の西と
ゝ清水の寺よりつゝ四
方の亀ゝを孫まハ苑の深木の
亀山や桂ゝ流ゝく大井川城よ
深世のさかゝれやゝ風ゝ山嵐
の風ハ松の尾小倉の里の夕霞ゝこ

うつをわすの神のまうさるべき祀
紀貴勝群集する法華の法ろた
つとえのまうすもこれよりも唯法
ろ有難き叡山の法華経の法よ
中ハ為まとの為に二仏乃中間我ら
ときれ来ひある道ひまらん
あるとくく昆首羅磨ら作るる
南梅檀のうる宮殿にて神力を現
して天竺震旦神羽三国を海り
有難くも世尊よ仰ぎ給へ
西方乃ハ法とても御母摩耶ま
人の為涙のれ馬ものれ仏も母を

ろの山路ふ道ろう哭や人間の
死とてもおとらハ母を出まぬこ
るを悲ろ勿ろ悲歎してろ
初ろ来る親るあるるの神ものれや
百萬ろ軍を負へ給へ

柏崎

悲ろこの涙服よ寝ろ男乃煙胸よ
ろ情是を果まるよ三界を流
悲ろく粒人間の為孰の瞋雖き
老た月のろきや明き紀真ぬ
平ホの臺よ至らんとたるも歎ろ

ちく煩悩のきつるよ結ほぐまぬる
う出き羅漢の山高く生死苦
海ふかくいかみてう流せよ弟を
渡めんと云願きとも人る乃船三
口四意三のすれ道おほりき　れは
ちちゝ乃浄法あも三界一四ゐ
四弟子乃法四仏及流せと此時を
是之言葉乃行願の有へきや已刑
乃法池四来唱四乃浄土ゆへくを
書ぬへくと法華の法池の蓮乃
えん華をもとらちゝ生を号祢
うくを願世者とちゝの如
願こうねの罪よ動るへ仰樂を
極ゆるゝ願ちまくよせれ行うち
極乃品ゐまや寶の池乃水々と
くちれ演の言術教乃如の床臺
を示くの樂を極め量ゐき命者
仏成てや号我仏十方乃世界成
給て本願給ふ人ハ今の称ら
う称うき書のゆくを志ちゝ雲の
中ゐのくゆや西の方の祖岡を迎へ
陀くとう浄土の縁とゐ上を付へ
給ふこと称ゐを鐘の音心聴ゐを
て燈乃ゐき之うとあふゐりや

南無阿弥陀仏の御名を称へる極楽世界をかるべ
行つゝ

梅川

こゝゝ年こゝゝ絶てゝ花の鏡と成水い
取りこゝゝゝ曇るこゝゝと云ふ人御ちる
ぬ身ハ梅ハあくたゝ世花とたゝい
きこゝゝゝ梅いこゝゝ様も夢ゝゝ花
のこゝゝみこゝゝいこゝゝ月きこゝゝ梅こゝ
ゝこゝゝ散ゝゝ花ゝゝゝ落ても水の
ゝゝ表こゝゝゝ浪の花ゝゝゝ訓ゝも
今こゝゝ花こゝゝ梅乃やこゝゝ百千
鳥花こゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

花ようこゝゝゝゝゝゝゝゝゝ震と散こゝ露
こゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
川乃浪こゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝこゝ花をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
こゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
こゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

梅の花とうはるの春の花
とうはるとつゝしきはるの
はるのはるちる花のうつ
ゝ咲のこゝろ
緑めるを見て青柳の糸柳
まふはゝゝゝゝ
みよ鄙の
うゝ安れくゝ
瀧津波の花と散ゝくゝ
やゝゝまゝゝみを柳
ゝや行きも
波もみるゝゝまくゝ
見ハ来ゝの花
ゝゝき我ゝゝ

須臾も
ゝき
散迦大師のもんこの
ゝや
ゝゝき
責れゝ
ゝいまゝゝ
出家四
ゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ

を親族なくなりぬる時うつる事
ちくさの人々なげくたうたんや
人々なげき我ゆくだきりの事なん
三界安穏ぬ火宅天魔ども死
苦患の所なりいとんや乃貧
賤のほうよりやるとう羅
くろうん死よくるしのとうなる
業よ悲しひ行をみる地ごく
のきしのはきうちうまくなき
の事獄卒しくの血腥ぎうの百の
きうちに万死苦しうの剣樹地
獄のきしのはきの手に行るきの樹と

ふるえ八百節ばいうす足ふ刀
山ふせとるの山ふせとるよ
ゆせるうつ地獄のきしのはゆ
うのの大石もくれ罪人をを
沒の火盆地獄をのるよ火炎ゆい
たきはきくきの罪のうえん
をるをとゆきを或時は焦熱大焦熱
のほのかよ山せい或時はゆ蓮大の
蓮の氷よるを殊獄をを
たる火燈完沂をゆを　割をを
鉄丸をのこ沼してを銅汁を飲と
のゆ地ごくれきしのを量なり獄

見ぬ人ぞ　ひもも云過なり　高生徳
雨の悲　ひと　我らまいらくまれる人
き物より　ひさ　科のれん　四れ見の
身を責　く　ひ　板まを　いうらあり
月れの　の　深雪　ハ　後　世のまよい
あ　ひ　後の世のやうをは何と思
きん　胸の鏡　心まうあく
ひうあり　や　吸と　ありてゆよ　見　積る
あとやあ　責　あ　ろ　意　歩　やあらあ
しや　あ　思　線　やかみ　彼人の　神　とて
面　変　ひ　ひ　ひ　れ　を　有　板
五　神　ひ　ひ　ら　寄　め　く　白髪　ハ　乱

きひらうこれ　高　ひ　ら　きうこく
ひうく　天よさ　ひ　地よたを　出　く
ひうこ　ひ　つ　こ　ひ　く　時　ひ　の
花　ら　の　五月　雨　ひ　ふ　ま　と　ら　ま
面　よ　ま　白　汗　を　ひ　て　彩　ま　ハ　露　の
ち　け　ま　ま　ひ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ひ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ひ　ま　と　い　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
き　立　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
た　り　中　と　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
い　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

昭のみるはにみもうてあはこ見出
御みを御ふみてこの酒の男女よ
ひく伸者の四へうてきるく

東岸居士

生をうるよ仏をそして苦よろこと
を交ゝて如来よ御るよ酒つく園き
ゆう寄めよ弱く六道のちまく
よを速い如何ほく生死の廓よ
を宮ゝ如栖ほゝ生死の物者を
は夢とやいんんようもさん
こまゝ有とつゝ寺とをれい雲こ

のほゝ煙と消ゝ後を残をと
もつくゝゝなゝといを寺ををれい
み恩宮乃中四とくまつく物を
をゝ視をうこの乃ちをと言るゝ
仏芝蘭乃契りの祈ゝ如ゝ如
を稔歓の焔よこの世を幻蓮大幻
蓮の氷を絶よとうす事ゝ鷲
鷲乃みはまのをゝよ服をい慈悲
雲源ようほせをも焦熱大焦熱
乃焔を絶よをゝ事ゝ乃ゝ
ゝゝのき所を持く 教生倫
蓮邦嬉い所ゝを作る罪

ありあふ語綺語悪口あ舌ハくちまくつくる罪ものり貪欲瞋恚くちはまくい四よをもつく絶寺法の紅乃こゑれ掉みるゆ屏よゑんん

蝉丸

花ゆ都をこゑ山ゑくくうき秋
よゆくゑ賀の神河やをゑ山河を
ゑゆわくゑ霜月ゆよしゑくん
ゆくハ離をゑ杜坂や関乃こゑゑ
思ゆよ孤ゑゆ音羽山の名
強行の都や杜出をゑ宝きゑく

キサミ形
ひよりモ

をの鳴やゆつ法乃山科の宮人
ををゑ母ゑゆよ杜ゆなをを四ハ清
瀧川と知ゆ逢坂の関の清乃
よ影みくくゑゆ賢人をゑ月
高雄ゆあゆくも迎行くゑ水もハ
をゑ井の口きゑれハ秋ゆくあき
海や鬢ハをゑとゑをいをき袋ゆ
ゑををゆくゑゑくゑゑくゑん
影ゑつる水をかくゑゆふ法のゑ
つくゑ乃秋をゑくゑや

古車

世尊のたまはくに見もめてく
ちぬきいちるもたひらかく一天
四海波をうち治めて國も動か
ぬあらんかの乃車は我くまく
道きはらぬ大君の治勢の面か
るを祈をさせ給へり　特天南國
作法蓮や丞蓮乃うきをかけく
ちに頼らもあやうう此法恵
をうく行術人の憐を祈のちう
なら乃ゝ和と法泡佛乃心教を
あまねくあらまをしへくく
教この中ゝも法和ゝうるに

仏を流せをつふとわ法ゝ知る
きん弘天我おら教をもを頼是
中ゝも法泡は毎ゝまくま向せる
文ゝもあるをくたら経へるま
みくい　阿法泡佛ゝく新寺の善
薄者ゝに紀のゝ教単菓笠
乃笛和琴者ゝをくいきへとも
文ゝ芸つすゝ乃ゝとたゝもら
乃きはゝすれ迷ゝさらゝ八
ちらもうち捨ゝるゝ晴ゝ
ちをくく和ゝし

鳥追

うつ敵くるまるこゝ村とく
めなる竜をたくさん扱いつもた
敵ハとりくこゝのうやゑ波乃
花若よりの人くくもおづやく水
鳥いとせあくき時いうも
玉きよりの夜とうろう変
まとみやとてまとろめいよ
なや我乃もの猫うとや根
うハ見くよ増とくく家や
なもうの人の波乃ねそて思
ひ乱まて我四ちとろよ

なる敵乃筋あき拍子とも人
やきく賢ろうや家を離
まくこゝの月乃角あき教
とて心まち根ことろこハよ四の
園をまくまれす まいくゝ
鳥きいくいるハの雲ようろう
ぬまくいぬちあゝ坂のゆの敵弟
ろうの別きの滝敵を敵うち陸
まて移もつまやおりよ

竜を敵

敵乃竜も時四てく日も西山よ

いろは事ハよ数の事も通ゆく六つ
の数うちふよ五河乃節をうつり
きぬ琴行くなる妻琴の乃ひき
離れいつくまり我ことく思ひ様の
やりくうつつゆや傷らく
うちふよ四つの数ハ世乃中よく
思ふ事も恨ことと云事もる
知るらいなくハ様りおハ思つて
九つのく数半に心賤がりや
恵恋つわ妻の面影よえるり
うまつや責らるに身かりに
忘ろしてりハ二世のうしも有へ夢

申迷ひ龍出る事あくなつり
乃迷ひ竜や行くるもつつの迷ひ龍

第二段

名よし行ふあにた津のく斉に
も大宮乃うち迎きまこめあいき
さやしあると帰ふる海士のよい色
や讃をきる右寄さも引く綱の目
去前よ見えてる有柳あまた賤
きよや人く 面白や四あらんく
人よえさるや浪乃雨の難波わく
里乃長の氣色松ほろ舞こちま

ある沖の磯五八千鳥 群れてくち
てあらふや海士の小舟のくち
ぬきこぐ櫂のくしとりの〻鶴もあり
あれも露もまだきの色づくとら
なくら世 雁渡津九春のまや
ゐつゝ梅の花さい ぬふてふと
星の翅ふハ 鵲も有明の月
うゝの神さすい 天津しめのきぬ
笠ゝれいしめ 是ふまく 雁渡
めのくゝ陸 神笠のうら笠の取
のあ〻へもえる 明渡あ
へのうゝ陸ゝ 雁渡

りくくりくりや陸のあを
なるゝ廣ゝ 山もあき山たも
り海や 片地ノホシ 山梅市地こキ

放下僧

う霧の湊の鶴毎を鳥鳴えく
うへ見ゝつこれを見ゝまきく
時を霧のあ〻や谷の色ゆへ
空煙朝ゝ霧と皆是こ界順心の
こうゝりあ山ほ〻ゝこゝろと
のとり終へや 月の光あにを
うき雲の たゝと山やゆぬゝ人

面白き花の都や筆よのくらも
ゆゑ〳〵東ゐ祇園きようたち
ゐる瀧殿音羽のあらに地主の
桜ちり〳〵西を法師嵯峨
清寺まゝはまゝ水車乃わ
ゐ寺なんを花の川なみ河柳ハ水
よを向ゐ〳〵ちゝ竹ゐ風よ
ゐまゐ〳〵かゝ〳〵ちゝ竹ゐ
ゐく都ゐ〳〵ハゐ
ゐ茶ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ
まゐ〳〵わゐ
放家ゐ向ゐ

つ乃市のゐ〳〵ゐ〳〵ゐ
ゐ向ゐ〳〵ゐ

松出

ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵の世ゐ心
ゐ〳〵ゐ道ゐ人乃ゐ〳〵ゐ積
善の除ゐ家ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ
ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ濁世の人間ゐ
ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ
葡ゐ〳〵ゐ竹ゐ世ゐ〳〵ゐ
ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ
ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ

ゆとこまち 薄を分て 窟の
てはりん 蛍の高とめる草花
雲袖 面白や千枝よきくも
乃音 ちる音乃 きりはく
ちるもきりはく
乃ちてふきりくすひくく色乃
音の中よりく神楽ふれ出乃
色ちんくくつちんとてよる色
白ふくなり
ひも明るの あ乃面ぬぬ
ちるふよ人名結の神をまね
おもる乃ほのうよくく孤をく

草花ちる河たの系に草花
ちるあたの系よ出乃音斗
や神ちんの出乃斗やのちん

一説ノ中程ヨリ百時ハ夜ノ

寛政六年甲寅閏霜月

女郎花　一調打上ノ手

幸流 藤山ニ受

甫

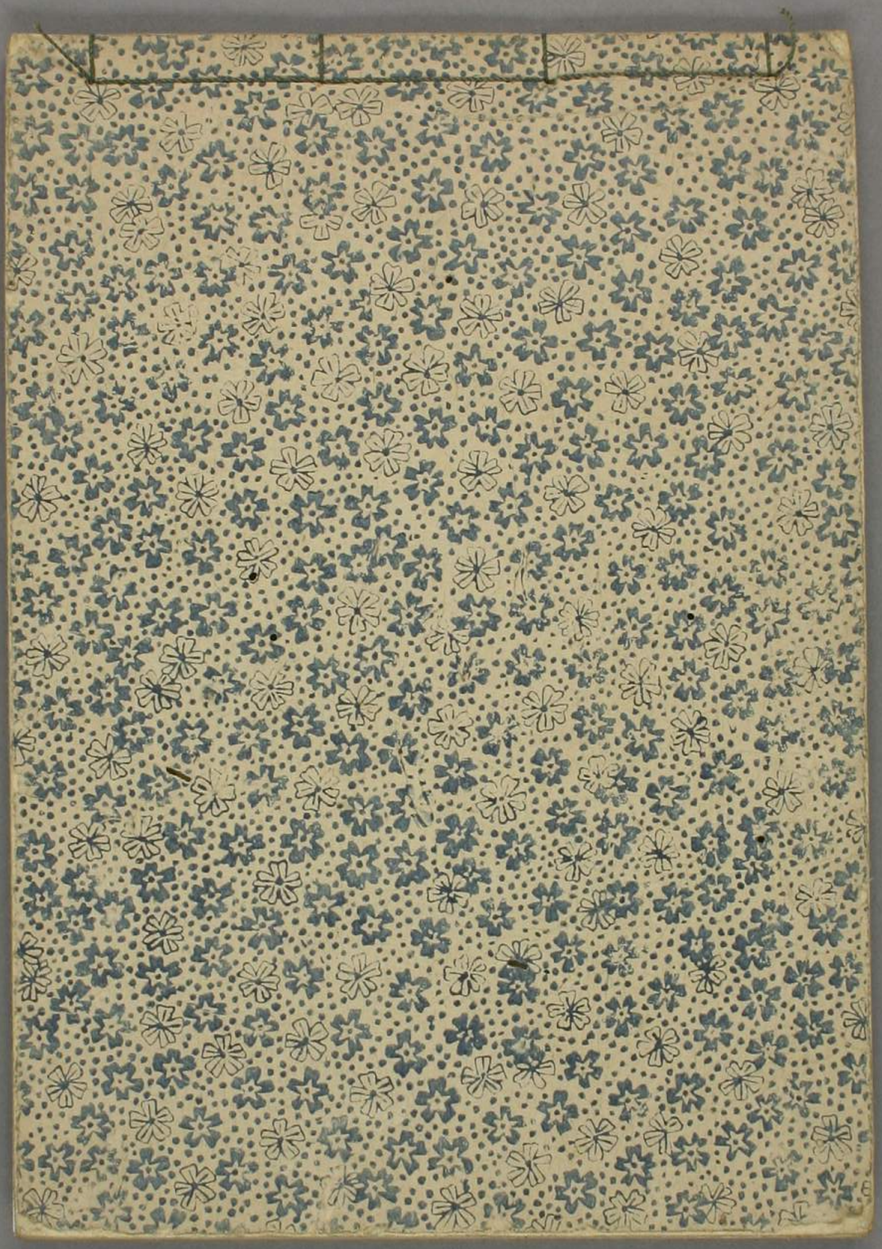
ヨイ ○ ○ ヨイ ○○ ハア ○ ○ ヤア △-△ ヨイ ○○○-○-○ 先シヌクモ

△-△ 先シヌツモ ○○

邪婬の

○-○ ○ ○ ムスブ ○ ヤ○ ○ ○-○○-○ ヨイ △-△ ツ イヤ △

悪鬼ハ身を責めて

△ ○○

邪婬の